



| | |
|--------------|---|
| Title | <書評>オーリー・ローベル著『平等を作る機械 : デジタル技術で築く、より明るく包摂的な未来』 ニューヨーク : Public Affairs, 2022年、ISBN : 9781541774759 (ハードカバー)、352頁 |
| Author(s) | 李, 燕; 李, 明 |
| Citation | 大阪大学国際機構研究論集. 2026, 30, p. 79-84 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/104091 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

オーリー・ローベル著『平等を作る機械—デジタル技術で築く、より明るく包摂的な未来』ニューヨーク:Public Affairs、2022年、ISBN: 9781541774759 (ハードカバー)、352頁

李 燕*・李明†

1 はじめに

『平等を作る機械—デジタル技術で築く、より明るく包摂的な未来』(『The Equality Machine: Harnessing Digital Technology for a Brighter, More Inclusive Future』)は、アメリカのサンディエゴ大学法学部教授であるオーリー・ローベル(Orly Lobel)氏による評論である。ローベル氏は、同大学のウォーレン記念講座特別荣誉教授であり、雇用・労働政策センター(Center for Employment and Labor Policy: CELP)の創設者兼初代所長でもある。知的財産法、雇用・労働法、技術政策、人工知能(AI)と法、イノベーションと人的資本、平等と差別を専門分野とし、多数の学術論文や書籍を執筆しているほか、講演者、コンサルタント、評論家としても活動している¹⁾。

現代社会においては、社会・経済的格差や教育・健康格差など、さまざまな分野で不平等が根深く蔓延している。平等な社会の実現は、世界各国に共通する目標であり、規範的価値として広く支持されている。平等な社会の実現は、テクノロジー時代に特有の課題でも、一国に特有の課題でもない。この目標を達成することは決して容易ではなく、新興技術が進展したからといって魔法のように解決できるものではない。むしろ、新興技術の進展に伴い、不平等が拡大するのではないかと懸念が提起されている。

こうした背景のもと、著者は責任あるテクノロジーに関する新たな視点として、AIをはじめとするデジタル技術を用いて不平等に取り組むという考え方を

を提示している。著者は、「『平等』が何を意味するのかは、文脈によって異なる答えが与えられる」(29頁)と述べており、また「アルゴリズムは歴史的差別を再生産すべきではないが、同時に、魔法の杖を振るように過去の過ちをすべて解決してくれると期待することもできない」(35頁)という前提に立って議論を展開している。その上で著者は、デジタル技術の発展を「平等を作る機械(equality machine)」として方向づけることが可能であると論じている。これは、デジタル技術、とりわけアルゴリズムが社会における不平等を埋め込み、再生産してきたと批判されることが多い中で、直感に反しつつも積極的な発想である。著者は「平等を作る機械」を、革新的な技術を活用して複雑な社会問題に取り組み、より前向きで平等な成果へと導くための枠組みとして概念化している。それは同時に、技術の設計や利用のあり方を再考し、未来のテクノロジーを建設的な社会変化へと導くことを促す思考様式でもある。

デジタル技術が私たちの生活のほぼあらゆる側面に浸透するなかで、テクノロジーは社会を絶えず再構築し続けている。技術の進歩が人間社会に影響を与えてきたのは何世紀にもわたるが、特にAIの発展により、今日ほど急速かつ広範に再構成が進んだことはなかった。私たちは、ますます複雑化するデジタルプロセスによって形づくられる未来へと向かっている。この過程において、希望をもたらす一方で不安を喚起し、魅力的であると同時に恐ろしい側面を併せ持っている。著者は「テクノロジーが既得権益者にさらなる力を与え、何十年にもわたる不平等

* 大阪大学国際機構 特任講師

† 大阪大学学際大学院機構 准教授

を埋め込み、増幅させるとき、私たちははるかに大きな悪に直面する危険がある」(41-42頁)と指摘する。一方で著者は、「コンピュータが私たちの関心事をより正確に測定・予測できるようになれば、何世紀にもわたって市場、社会、家庭を形づくってきた人間の偏見を減らすことが可能である」(41頁)とも述べている。

私たちは今、重大なパラダイム転換の瀬戸際に立つ。本書には、現実に対する批判的分析と未来への想像力の双方を通じて、テクノロジーをポジティブな変化へと導こうとする著者の姿勢が明確に表れている。著者は、リスクから目を背けるのではなく、それに建設的に向き合いながら、平等な社会の実現におけるテクノロジーの役割を再考し、AIがもつ可能性を受け入れることで、より明るい未来を創造する方向へと転換すべきだと主張する。本書では、平等を作る機械を通じて、「社会的現実がいかに不平等であったかを解剖すると同時に、推進される平等な社会のあり方を夢見る必要がある」(40頁)ことが促されている。すなわち、「(過去や現在に)何が間違っているのかを変えるためには、テクノロジーを善のために受け入れたとき、(将来)人間が創り出す世界がどのようなものになり得るのかを想像する必要がある」(41頁)。例えば、テクノロジーを善のために活用することで、「充足感やつながり、喜びやウェルビーイング、統一や調和」をもたらし、同時に「疾病、搾取、不平等、恐怖、排除がもたらす悪影響をなくす」世界がどのような姿をしているのかを思い描くことが読者に勧められている(41頁)。

こうした主張を支えるために、著者は、平等を作る機械が単にテクノロジー固有のリスクに対処するだけでなく、社会そのものに内在する構造的な問題にどのように向き合い、対処し得るのかを示している。本書では、雇用、賃金格差、社会運動、医療・健康、セクシュアリティや親密性といった、公的領域と私的領域における従来の不平等の諸課題に取り組むために、AIをはじめとするデジタル技術を活用した、アメリカ、イギリス、オランダ、日本、韓国といった国における実践事例と、その設計の方向性が提示されている。

2 本書の概要

本書は、序論、1章から10章、そしてエピローグ

からなる全12章で構成されている。著者はAIを、心・身体・感覚、さらには精神や魂までも含む、人間の「完全なパッケージ」を志向する、ソフトウェアとハードウェアが一体となった未来のテクノロジーとして捉えている(35-36頁)。こうした著者の認識を反映するように、本書は「心」「身体」「感覚」「精神」「魂」といった章題から構成されており、テクノロジーそのものよりも人間を中心に据える著者の関心を反映していると考えられる。本書の目次は以下のとおりである。

序論

I. 善のための力 (A force for good)

第1章：なぜ私たちは平等を作る機械を必要とするのか (Why we need an equality machine)

II. 心 (Mind)

第2章：採用面接のカーテンの裏側 (Behind the hiring curtain)

第3章：自らの価値を知る (Knowing your worth)

III. 身体 (Body)

第4章：#BotToo

第5章：乳房、子宮、そして血液 (Breasts, Wombs, and Blood)

IV. 感覚 (Senses)

第6章：彼女は語る (She speaks)

第7章：信じるものを見ている (Seeing is believing)

V. 心 (Heart)

第8章：欲望のアルゴリズム (Algorithms of desire)

第9章：ロボットを愛することの快楽と危険 (The pleasure and danger of loving a robot)

VI. 魂 (Soul)

第10章：あなたと私、そして人間—機械の家族 (You, me, and our human-machine family)

エピローグ

いま、私たちは平等を作る機械を構築する (Now we build the equality machine)

序論では、本書の出発点と目的が示されている。ここではデジタル技術の活用に対する著者の基本的

な理念や原則が提示されており、本書全体のトーンが明確に打ち出されている。著者は「リスクや欠点はあるものの、デジタル技術は社会全体の利益—公平性、包摂性、経済成長、機会の拡大、イノベーション、そして何よりも平等—のための強力な力となり得るし、そうならなければならない」という認識を出発点としている（4頁）。さらに「平等を推進するデジタル未来像に向けた広範な原則と並行し、実践的なツールとルールを開発すること」を本書の目標として掲げている（5頁）。

第1章「善のための力」では、新興技術に組み込まれたさまざまな不平等に対する広範な懸念を踏まえつつ、著者は発想を転換し、新興技術を私たちの世界に遍在する不平等に取り組むための「善の力」として再方向づけるべきだと主張している。両極端な未来像が想像される一方で、デジタル技術そのものの善悪をめぐる議論に明確な結論が出ないまま、技術分野は急速に進化し、私たちの生活のあらゆる領域で変化が生じている。こうした状況の中で著者は、「技術＝権力＝悪」（18頁）という単純な構図から脱却し、現在進行中の現象や将来の可能性を見据えながら、テクノロジーを善のために活用するための議論が必要であると論じる。すなわち、私たちは「テクノロジーの失敗に対処するだけでなく、テクノロジーを活用して社会的失敗に取り組む機会として捉えること」が可能であり、そのように技術を善のための力として方向づける視点が示されている（17頁）。

「心」というテーマのもとに構成された第2章と第3章では、経済的な文脈において、職場における採用や賃金における格差や排除を検出・是正するために設計・適用されたアルゴリズムモデルが多様な属性集団の平等を実現するための意識向上に寄与することが紹介されている。第2章「採用面接のカーテンの裏側」では、組織が求人検索、採用、雇用、賃金、評価、昇進、解雇といった雇用プロセス全体を通じて、バイアスを軽減するための機械学習アルゴリズムをどのように活用しているかが示されている。初期の求人広告から履歴書選考、面接、職場文化、ワーク・ライフ・バランスに至るまで、雇用市場における格差や偏見を検出し、バイアスを減らす方法を特定する平等を作る機械が提示されている。

続く第3章「自らの価値を知る」では、アルゴリズムが膨大なデータから職種や企業間の賃金格差に

対する認識と可視性を高め、その格差を縮小する可能性を示している。賃金における排除やバイアスを是正・検出するアルゴリズムモデルを通じて、差別的慣行を防止する可能性を示している。このように平等を作る機械は、従業員が賃金交渉をより適切に行うことを支援し、雇用者が処遇の是正や補償、定着を図ることを助ける。さらに、政策立案者が市場における同一賃金のための制度的変革を生み出すことを可能にする。著者は、さまざまな利害関係者がデータを共有・分析し、格差を特定し、合理的に是正措置を交渉し、テクノロジーと協働して、より公正で平等な市場へと進む平等を作る機械を示している。

「身体」というタイトルのもとに構成された第4章と第5章では、身体的側面における不平等と平等を作る機械としてのデジタル技術の可能性が探究される。第4章「#BotToo」は、本章で言及された「#MeToo」運動から着想を得ているタイトルであると思われる。著者は、テクノロジーが、性的暴力やハラスメント、人身売買、差別、オンラインハラスメントと闘う社会運動において重要な役割を果たしていることを示している。テクノロジーによって報告や苦情履歴の追跡が容易になることで、長らく沈黙させられてきた不正行為の集団的暴露を可能にし、個人や企業に対する説明責任が強化される。しかし、テクノロジーのポジティブな側面だけに焦点を当てるのではなく、社会運動を技術で支援すること、安全性、プライバシー、表現の自由の喪失とのトレードオフについても論じている。著者は、プライバシーがテクノロジーによって保護され得る一方で、同時に侵害される可能性もあると指摘する。さらにプライバシー権自体が他の権利や自由の行使を制約する要因となり得ることから、バランスを取ることが重要な課題であると論じている。にもかかわらず著者は、公共機関との協働を通じて、技術的進歩がこれらのトレードオフにおけるコストと便益を変化させ得ると考えている。著者は、善にも害にもなり得るテクノロジーの競争はモグラ叩きとなる可能性があるとしつつも、テクノロジーが民主社会において常に求められてきたプライバシーと他の権利との微妙な均衡を調整するための道具を与えてくれる可能性がある結論づけている。

第5章「乳房、子宮、そして血液」では、医療・健康分野におけるAIの可能性に着目し、女性や少女、有色人種、障害者、慢性的な健康リスクを抱え

る人々といった脆弱な集団がテクノロジーからより大きな恩恵を受け得ることを、具体的事例を通じて論じている。さらに著者は、ビッグデータが、医療・健康分野に長年組み込まれてきた制度的排除や格差を検出・可視化することで、不平等に関する語りを転換し得ると述べている。一方で、このプロセスにおいては、ユーザー情報の私有財産と分配的正義、データプライバシーと健康、表現の自由と平等といった競合する価値のバランスは、今後の技術活用における重要な課題であり続けると指摘する。しかし著者は、テクノロジーのもたらす善とリスクを踏まえつつ、テクノロジーそのものを活用することで、これらの価値間に生じる緊張を同時に緩和し得るとも論じている。

第6章「彼女は語る」では、音声AIや自動翻訳、対話型アシスタントにおける「声」の設計が中立ではなく、女性音声の標準化や性別の自動割当、従属的な人格設定を通じて、ジェンダー規範や権力関係を技術的に再生産していることを示している。著者は、デフォルト設定や人格化されたインターフェースが、日常的な使用のなかで「誰の声がふさわしいか」「どの役割が自然か」という期待を固定化していく過程を具体例で示し、設計そのものが社会規範を作り出すと論じる。したがって問題は利用の仕方ではなく設計そのものにある。著者は、開発段階から多様性と公平性を組み込み、声や人格の選択を可視化・可選択化し、企業責任や制度的ガバナンスによって設計の社会的影響に対する説明責任を確立すべきだと主張している。

この「設計が規範を作る」という視点は、第7章「信じるものを見ている」において視覚技術の領域へと拡張される。第7章は、画像検索、顔認識、地図、メディア表象などの「見る」技術が、世界をそのまま映すものではなく、アルゴリズムやデータの選択を通じて、ジェンダーや人種、社会的役割のバイアスを再生産していることを示している。著者は、検索結果に現れる「典型的な女性像」や、画像データのバイアス、公共空間や歴史的記憶がデジタル上でどのように可視化・不可視化されるかといった事例を通じて、「見えるもの」が私たちの認識や判断を形づくっていることを示している。こうした批判を踏まえ、著者は賃金格差を検出するソフトウェアになぞらえ、発言や可視性のバイアスを追跡する技術を社会の諸領域に体系的に組み込むことを提案してい

る。そのうえで、視覚技術を不平等の再生産装置からその是正に資するインフラへと転換すべきだと唱えている。

第8章「欲望のアルゴリズム」では、分析の対象が欲望と親密性へと移行する。マッチングアプリやレコメンド機能といった「欲望を媒介するアルゴリズム」が、恋愛や親密性を単に効率化するのだけでなく、誰と出会い、誰を魅力的だと感じるのかという基準そのものを作り変えていることが論じられている。著者は、Tinderなどのデーティング・プラットフォームを例に、好みや相性の数値化・最適化が、ジェンダー、階層、人種、外見といった社会的バイアスを強化し、スワイプ文化やランキングが人間関係の市場化と、選別・排除を常態化させる点を指摘する。そのうえで、恋愛や欲望を媒介するテクノロジーは、人々をエンパワーする「平等な愛の機械」となり得る一方、既存の権力格差を無視すれば不平等を強化するため、平等という理想と現実の不均衡を意識的に調整する設計が必要だと主張している。

この問題意識は、第9章「ロボットを愛することの快楽と危険」において、より直接的な倫理的問いとして提示されている。第9章は、セックスロボットや恋愛ロボットといった「親密的な関係を築ける機械」が、孤独の緩和や新しい関係の可能性を開く一方で、女性の客体化、同意の不在、暴力や支配の正当化といった深刻なリスクを孕んでいることを論じている。著者は、ポルノグラフィや人形、商業化された欲望の歴史を参照しつつ、ロボットが従属的に設計されることで、人間関係における非対称性やステレオタイプが強化される点、さらに「同意」をプログラム可能なものとして扱うこと自体が概念の空洞化を招くことを指摘している。著者は、セックス・テックやセックスロボットを一律に否定・禁止するのではなく、多様性・平等・エンパワメントの原則を組み込んだ設計と制度によって、社会に前向きに導入すべきだと述べている。

そして第10章「あなたと私、そして人間—機械の家族」では、議論の射程が家族、教育、介護、育児、孤独対策といった生活の基盤へと広げられる。第10章は、ロボットやAIが家庭やケアの現場に入り込むことで、人間関係や「家族」のかたちそのものが再編されつつある現状を描き出す。著者は、介護・見守りロボット、子どもの学習支援や情緒的伴走を担うロボット、友人・相棒として設計される存

在を例に、機械がケアや感情労働を担う可能性とともに、依存の深化、関係の代替、責任所在の曖昧化、さらには誰がケアの主体となり周縁化されるのかという不平等が再生産される可能性を指摘する。したがって著者は、ケアや親密な関係を機械に委ねることを単なる効率化として受け入れるのではなく、人間の尊厳、関係の倫理、ケアの主体化と周縁化といった問題を踏まえ、設計と制度の両面から意図的にガバナンスすべきだという立場を示している。

エピソードでは、著者は、テクノロジーが不平等を「映す」だけでなく、むしろ「作り出してきた」を総括している。そのうえで、今後は意図的に「平等をつくる機械」を設計すべきだと訴える。著者は、アルゴリズムの不透明性、データのバイアス、プラットフォーム権力、規制の遅れといった構造的問題を踏まえ、技術設計・企業統治・法制度・市民参加を横断する包括的なアプローチの必要性を示している。とくに、説明責任、監査、公共的ガバナンス、多様性の組み込みを、倫理的配慮にとどまらない設計要件として位置づける点を強調する。著者は、問題の指摘に終始するのではなく、制度と設計の両面から「どのように作り直すのか」という方向性を示し、本書全体を未来志向の提案へと結びつけている。

3 高等教育におけるデジタル技術活用への示唆

本書は、公的領域と私的領域の双方において、アルゴリズムや技術設計が社会の仕組みを編成し、社会的規範や権力関係を再生産していることを示している。テクノロジーは既存のバイアスを反映するだけでなく、社会そのものを形成する力をもつことが、公私の領域を横断して論じられている。同時に本書は、テクノロジーが「平等を作る機械」として機能し得る可能性も提示している。批判的でありながら建設的な問題意識に根ざし、技術革新を通じて平等とエンパワメントの実現を目指す著者の「平等のマインドセット」は、有望であると同時に不可欠な視座である。

筆者らは、著者が述べる「テクノロジーは、答えを探す過程で、私たちが本当に達成しようとしているものは何かを明確にする」(31-32頁)という見解や、「新たな計算能力を用いて格差の源泉を明らかにし、そこから学びつつ、アルゴリズムをより精緻に

方向づけ、私たちが望む平等を作る機械の姿を目指すべきだ」(32頁)という主張に賛同する。一方で、本書は、個人間の平等を実現するための技術活用や設計の可能性に焦点を当てるあまり、デジタル技術に対する抵抗や、国家や地域間の不平等といった視点が捨象されている印象も否めない。

本書は高等教育分野に特化した内容や事例を直接的には扱っていない。しかし、著者が指摘するように、統計的相関を用い、過去のデータに基づいて未来を予測するというアルゴリズムの手法自体は決して新しいものではない。科学的探究、医学、マーケティング、政策など、さまざまな分野はいずれも、過去から未来を予測する営みに依拠してきた。ただし、こうした予測手法が自動化され、社会の各領域の意思決定プロセスに組み込まれることで、予測システムの影響力は飛躍的に高まり、「不正確さであれ正確さであれ、誰かが被害を受ける可能性がある」(35頁)という新たな問題が生じる。

差異や排除がいかに技術的設計のなかに埋め込まれているのかを可視化する本書は、入学選抜や国際教育に携わる者を含む高等教育分野のリーダー、研究者、実務者にとって、新興技術を「平等を作る機械」として捉え直すための有効な教材となりうる。本書は、AIをはじめとする新興技術を中立的な存在や不可避の解決策としてではなく、一連の意図的な「選択」の積み重ねとして捉え、それらがより包摂的で公正な未来を前進させ得ることを示唆している。本書は、大学が募集、選抜、学生の移動といった場面でデータ駆動型・アルゴリズム型システムの活用を強化するなかで、設計・導入・ガバナンスにおいては、効率性や予測精度のみならず、公平性を中心原理とする、平等で責任あるアプローチが求められていることを示している。また本書は、研究者に対して、技術的最適化を超えて、不平等を再生産する可能性を批判的に検討するとともに、より包摂的な結果を保証するために意図的に設計・導入され得る技術の可能性を探究する、学際的かつ公正志向のアプローチが求められていることを示唆している。

研究者として私たちは、平等な社会の実現に向けて研究を導き、設計に知見を提供し、新たなテクノロジーの目標を形成する責任を負っている。多様な背景をもつ人々への相互理解と学際的な協働は、未来の「平等を作る機械」を形づくるための重要な方法の一つである。この過程において、AIは量的分析

やパターンの特定、予測を得意とする一方で、例外や人間の主観的意味を取りこぼしやすいという特性をもつ。そのため、コンピュータサイエンティストや量的研究を主とする社会科学分野の研究者に加え、質的研究（と分析）を主とする研究の重要性は今後ますます高まるだろう（村上, 2023）。明るく包摂的な未来に向けて、多様性を尊重する高等教育、ひいては社会をいかに設計し直すのかという問いを共有するうえで、本書は日本の高等教育においても重要

な出発点を与える一冊である。

注

- 1) サンディエゴ大学法学部 (n/d). 「オーリー・ローベル略歴」. https://www.sandiego.edu/law/about/biography.php?profile_id=2844. (参照 2026-01-12).

参考文献

- 村上靖彦 (2023). 客観性の落とし穴. 筑摩書房